

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四 八〇三三
京都市中京区蛸薬師通河原町東入
電話 (〇七五) 二五三・〇七〇七

『揺れる情(こころ)』通信③〇

稲荷山武田病院院長 土屋宣之/元京都医療センター外科部長
今回から「言霊」が冷遇されていた時代とそこからどう出直してきたかをお話しします。

「言霊」は歌合せの流行という好機を捉えて漸く復興の道を開きました。しかし生活への屈従を脱したというような簡単な話ではありません。「言霊」が「言霊」としての存在を意識する余地がないほど生活に密着し、平凡だが現実的な生活感情のうちに浸ってこれを映し出すのに我知らず苦勞していた期間は大変長い期間でした。そうすれば才学が「言霊」を追い詰めたところは何かのことはない「言霊」にとつて全く健全な状態であり、言わば「言霊」は生活のただ中に落ちて沈黙し、そこから再び出直すということが納得できます。才学の舞台を望み「言霊」が自力でおのれを掴み直し顧みられない時代から復活したのです。

《京都南座「吉例顔見世興行」》12月1日〜25日

京都の師走の風物詩、南座の顔見世興行の演目と出演者が発表された。今年は八代目尾上菊五郎さんと長男の六代目尾上菊之助さんの襲名披露公演を兼ねており、人間国宝の片岡仁左衛門さんら東西の人気歌舞伎俳優が顔をそろえる。昼の部は中村鴈治郎さんらの「醍醐の花見」で幕が開く。松本幸四郎さんの「一條大蔵譚」、菊之助さんの舞踊「玉兔」に続き、菊五郎さんの舞踊「鷺娘」、仁左衛門さんと中村勘九郎さんがダブルキャストで勤める「平家女護島・俊寛」。

夜の部は中村梅玉さん、片岡孝太郎さん、片岡愛之助さんに加え、菊之助さんが鬼王一子菊若丸を演じる「寿曾我対面」で始まる。「口上」を挟んで、菊五郎さんが弁天小僧菊之助を勤める「弁天娘女男白浪」、坂東巳之助さんら花形世代による「三人形」が上演される。

《自然に勝てません》

北海道から東北、関東地方での出来事かと、ニュースをテレビで見っていました。
しかし十月後半になって、京都近郊にも出没することが報じられるようになりました。

山奥で静かに生活し、冬近くには冬眠の準備をして、来春まで自分の寝床で過ごしているものと思ひこんでいました。
またこの冬眠に入る前の栄養を体いっぱい貯めたクマは、美味しさが一極増していることを看板にしている料理店もあります。
しかし十月末日現在で十二名が襲われて、生命を落とされたという事実の前では、そうしたことも言っていられない状況です。
猟友会はもとより自衛隊の出動まで報道されるようになりました。クマは人を襲うとき、顔を目がける、ということとそれを防ぐための姿勢が示されました。地面に伏せて、両手で頭をかかえ込むようにすることです。しかし、この姿は、わたしには自然に勝てなくて平伏しているのしか見えませんでした。自然には勝てないことの現れと教えられている姿でした。

《ブドウの再利用 グレープシードオイル》イタシヨク 福村直

ワイン造りの残った搾りかすはグラッパに使用されますが、その後は更にもう1段階再利用され種子から食用のグレープシードオイルを搾ります。ただし現在でも1000mlを作るのに100kgもの種子が必要となり、大変高価で近現代まで生産はほとんどされていませんでした。きっかけは世界大戦をきっかけに食用油の不足からこのオイルが注目され、また近年ではブドウに含まれるポリフェノールの動脈硬化などに対する効用が一般に知られることで、更に生産を伸ばすこととなりました。ほぼ無味無臭であることから調理だけでなく、マッサージュなど化粧品としても利用されています。生産量こそ多くありませんが本来のワイン造りを終えた再利用原料となるため原価は安く、新たな耕作地や作物も必要でないため環境に優しく現在の持続可能な社会に合致しています。

健康レシピ

栄養士 國松美也子

《12月レシピ》

冬に旬を迎える白菜は、風邪予防や免疫力アップに効果的なビタミンCが豊富に含まれおり、食物繊維やカリウムも豊富です。
白菜とお揚げの柚子胡椒煮(2人分)
材料：白菜1/8株、油揚げ1/6枚
調味料：出汁パック1個、みりん大2、薄口醤油大1、柚子胡椒大さじ1/3
①白菜を2センチ幅ぐらいに切る。
②油揚げを短冊切りにする。
③鍋に①を入れ、水を500ccほどと出汁パックを入れ火にかける。
④グツグツしてきたら②の油揚げを入れ、みりん、薄口を入れ煮込む。
⑤白菜が柔らかくなれば最後に柚子胡椒を入れて完成。

《大原流声明雑話③》 實光院住職 天納玄雄

如法写経会は、写経によって功德を積むとともに、弥勒の世まで法華經の教えを残すという理念に基づいている。そのため身心を清めるための声明である法華懺法は、殊に「如法懺法」と呼ばれる丁寧な次第によって修される。

また写経を行うにあたり、使用される道具にも細心の注意が払われていたようである。たとえば法衣は新しく仕立てた清浄の衣が用いられたし、殺生による穢れから離れるため動物性の原料が避けられた。当然、毛織物や絹は使えないため麻や苧麻、場合によっては和紙を張り子にして縫い合わせた紙衣も用いられたようだ。經典を書写するための筆は草や竹の茎を潰して作った草筆や竹筆であったし、墨汁も柔らかい岩石を砕いたもので代用された。紙ですら水で洗って清めてから使う徹底ぶりだ。

こうした写経は、横川・大原・鞍馬の勧進聖(ひじり)たちによって全国に広まっていったのである。